

比較民俗学の方法をめぐって

下野敏見[※]

種子島の民俗調査からはじまったわたしの民俗研究は、隣りの屋久島を調べ、その隣りの口永良部島、竹島、黒島、硫黄島を調べ、さらにトカラ列島におよんだ。その目で北上して薩摩半島を見、大隅半島を見、甕島や長島、天草をまわり、また一転して南下し奄美・沖縄の島々を一つずつ見てまわった。昭和29年からはじまった小地域調査はいつのまにか島々や諸地域の比較という「比較視点」を与えてくれた。

「民俗学は比較学である」という言葉はこうして自然に会得することができた。青い鳥を求めてではないけれども、かなたの島につよい好奇心をいだいてわたしの調査はつづいた。そしてできるだけたくさんノートし、撮影し、録音しようとつとめたが、それはしだいに改められていくつかの興味あるテーマにそって行うようになった。でも、実際に出会う民俗事象はいろんなものがある、テーマ以外のものにかえって興味ぶかく重要なものがあることも多い。そうしたものもできるだけ丹念にノートするようになった。そのうちに日本列島全域に関心をもちだし、機会あるごとに各地をまわり、国内における民俗の地域のちがいを体験をとおしても知るようになった。

日本国内における民俗文化のちがいは、第一に琉球（沖縄県全域と奄美諸島）とヤマト（トカラ列島以北の本土）のちがいであり、第二にアイヌ文化とヤマト文化の差である。このちがいのほかに飛騨あたりを境とする東日本と西日本の差もあって、いろいろな比較結果も出ているのであるが、わたしは最近では北日本（アイヌ文化の残る北海道）と東日本（飛騨から青森）、西日本（飛騨の西からトカラ列島まで）、南日本（トカラ列島以南の奄美・沖縄）の四区分をして比較する試みをしている。

たとえば背負い運搬具の問題を考えると、北日本（頭がけ背負い運搬）、東日本（頭ぬき背負い運搬）、西日本（二本縄背負い運搬）、南日本（頭がけ背負い運搬）というぐあいに分けやすい。そのうち、北日本と東日本は木文化が優勢で運搬具にも木製の背負い梯子や堆肥運び用のタガラ、大型の木桶などが見られるのに対し、西日本と南日本は竹文化が優勢で各種の竹カゴがあり、背負いカゴもいろいろあって、堆肥運びも竹カゴである。この北日本と東日本を合わせて東北日本、西日本と南日本を合わせて西南日本と呼ぶとつごうがよいと思っている。一概に東北日本という東北地方をさして、北海道が入らず、西南日本といってもあいまいであり、沖縄が入るのかどうかははっきりしない。

例にあげた背負い運搬具についてもうすこしのべると、東日本に入る伊豆諸島では、北日本や

※鹿児島大学法文学部教授

南日本とおなじような頭がけ背負い運搬である。これは伊豆諸島の文化がアイヌや琉球の文化と親縁関係であることを示し、東日本の海上遠く突き出た伊豆諸島は、東日本の圏外の文化要素もっているわけで、これは民俗圏論の適用によって解釈するしかない。つまり、太古、日本列島は全域に、アイヌ・伊豆諸島・琉球のように頭がけ背負い運搬が見られたが、のちに頭ぬき背負い運搬にかわり、また二本縄背負い運搬にかわり、東日本と西日本では頭がけ背負い運搬が見られなくなった。このような推定が可能である。「太古」「のち」とはいつか。これもあるていど推定可能である。トカラ列島を境にして西日本にある民俗と南日本にない民俗の差は、そこへの伝播時期の差は中世と古代の差であるという目安ができる（拙著『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局）。すなわち、中世において頭ぬきや二本縄の運搬法が普及したもので、古代にその始源はあったかもしれないが、古代にはまだ各地に頭がけ運搬法が見られたであろう。弥生にさかのぼるともっと多く、縄文人にいたっては大方、頭がけ運搬法であったろうと考えるのである。なお、運搬法については拙稿「物質文化（民具）の比較研究Ⅰ」（鹿児島大学法文学部紀要『人文科学論集』第35号、1992年）にくわしく記しておいた。

さて国内を見た上で南の方を見ると、与那国島から望見すると台湾が見られ、対馬からは韓国が見られる。その間に赤い国境線は目をこらしても見えない。好奇心の赴くところ、対岸へ渡るのはまったく自然の勢いである。わたしはこうして台湾へ出かけ、韓国へ行った。一回行くとまだいろいろ見たくなり、何回も行く。附属の島々も見たい。蘭嶼や濟州島、多島海の島々へも渡った。東シナ海域の東北部から東南部を見てしまえば次は中国大陸である。中国はまだたった二回しか行ってないが、九州・南西諸島・台湾に向き合う広東省、福建省、浙江省を中心にあちこち調べてまわった。このようにして日本と周辺諸国との比較をはじめだしたわたしの「比較民俗学」は拙著『東シナ海文化圏の民俗』（未来社）に書いたように「地域研究から比較民俗学へ」というコースを歩いたのである。

先に日本国内における圏論の効用を説いたが、わたしは国境を越えた東アジア地域においても有効であると思っている。たとえば、馬具のクツワ以前の制御具であるオモゲー（面繫）の問題。これについてはすでに何度かのべたので、ごくかんたんにとのべると、木製のこの制御具は北海道の馬、ドサンコも着用していた。ドサンコは南部馬系といわれるので、かつては東北の馬もこれをつけていたわけだ。現在、南西諸島の馬が使っているし、以前は薩摩や対馬、五島でも見られた。これだけの資料からいえば、オモゲーは日本における圏分布として列島の両端に見られ、中央部は鉄製クツワが覆っているといえよう。だが、オモゲーは殷の発掘跡からも出土し、北方の緩遠からも出土した（増田精一「考古学からみた東亜の馬具の発達」『馬』1970年、社会思想社）という事実からすれば、3000年前には中国でも用いられていたが、のち日本に伝播し、日本の一部にだけ残存しているといえるわけで、しかもその後クツワが中国全土を覆い、朝鮮をへて日本にも入ってきた。さらにオモゲーをつけていた馬は小形馬であったが、クツワをつけた馬は中・大形馬であって、馬種まで改良されて伝播したのである。このオモゲー（小形馬）・クツワ（中・大形馬）の伝播の状況は東アジアにおける圏分布図を描くこともできるのである。

東アジアの中でも、日本のトカラ列島を境にして北部（北日本・東日本・西日本）と南部（南日本）とでは民俗相がちがうことが多い。そのトカラから直線を（ほぼ北緯30度線にそって）西進させると長江に沿うていく。それは日本ほど明確ではないが、長江附近を境とした北部と南部とでは民俗相のちがいがあのように思う。たとえば、穀物の調整に絶対必要な箕についてのべると、日本のトカラ以北ではU字形の片口箕を使用し、トカラ以南では円形の丸口箕を用いる。丸口箕は台湾、フィリピン、インドネシアでも用いられ、片口箕は韓国、中国北部でも用いられている。このように東アジアを南北二つに割って民俗がちがうことも比較民俗学の中では注意しなければならないことである。『三才図会』（1607頃）にはU字形の片口箕が描かれている。鬮よ籠らんと称するこの片口箕の先端はすこしとがっていて舌状をなしている。ところが、『菅江真澄全集』第九巻には天明6年（1786）頃の東北の箕が記録されていて、それが『三才図会』の箕ときわめてよく似、しかもどちらも網代編みである。菅江真澄から200年をへた今日、このタイプの箕は東北に生きつづけ、遠野市の小林荒物雑貨店では1個4000円で売っているのである。中国に新緑のこの箕をわたしは喜んで買って帰り、研究室に飾ってある。U字形にして舌をもった片口箕は西日本や南日本にはない。いや南日本には片口箕もなく、円形の丸口箕のみである。

東シナ海をとりかこむ地域が一つの共通する民俗を根底に持っていると思うのは、女性の呪力による男性海人の守護のことである。たとえば、日本の船霊は七才の女の子の髪の毛を神体とする女神である場合が多く、男性船乗りを守護している。沖縄ではウナリ（姉妹）がエケリ（兄弟）の航海のぶじを祈って髪の毛などを守りとして支える。韓国でも船長室に安置してある船神は五色布に象徴される女神である。中国では福建省莆田市湄洲島の天后宮を中心とする媽祖信仰がさかんで、媽祖の神すなわち林默女が海に身を投じ海神となって中国沿岸の男性の航海のぶじを祈っている。媽祖の起源は10世紀とされているが、これより200年早い8世紀にできた『日本書紀』には、弟橘媛の入水による日本武尊の航海のぶじの話が記載され、古代東アジアには古くから女性の呪力による男性の航海のぶじを祈る信仰（ウナリガミ信仰）があったことがわかる。西日本の大田植に村の乙女が1人いなくなるとか、南九州の田の神を造ると娘がいなくなるという伝承は、「女性・（航海）・男性」の関係が「女性・（稲作）・男性」の関係に変換されているが、日本の稲が航海民（海人）によってもたらされたとすれば、これも東シナ海に共通するウナリガミ信仰の一つの現れである。東北の屋船儀礼（棟木に化粧道具をつりさげること）や西日本の建築の地搗きにもなう女性来訪なども一連のものであろう。

日本列島の中で、朝鮮経由でなく、南西諸島経由で伝播したと思われる民俗文化もいくつかある。たとえば、田芋がある。田芋はタロイモの1種で、そもそも田芋という名称からしてタロイモからきていないかという説もあるくらいだが、里芋そっくりの芋で、水田に水をはって作るのが特徴をなし、南西諸島にはアカ（赤紫）とシロ（白）の2種類がある。この田芋は台湾や蘭嶼にもつながるいっぽう、薩摩半島にも見られる。わたしの調査では韓国では田芋は栽培していないようである。もともと熱帯系のこの芋はしだいに耐寒性をつよめながら南西諸島から九州を北上していったものと思われる。

東シナ海域には四つの多島海がある。まず第一に長江から珠江の間の海岸線に点在する大小無数の島々。海岸線が入りこみ、天然の良港が多く、有名な港も多い。わたしが渡った島は温州、福州、莆田、泉州、厦門を中心とするわずかの島だけであるが、そのゆたかな民俗には目を見張った。ただ漁労面や海の信仰関係ばかりでなく、葬墓制や諸職、農業、民間信仰などの面においても都市部と断然ちがうような古くゆたかな相をあらわにしていた。この地域はおもに漢民族の居住地であるが、漢民族の伝承する古い民俗はこの多島海ともいべき中国東南岸島嶼地域に吹きたまっている感じである。考えてみると、日本の文化は直接には漢民族の文化を受容してきたのであり、そうであればこの地域はもっと重視してよいはずだ。また、この地域こそ南日本ないし西日本の地域との交流が当然想定され、歴史的にも幾多の交流が立証される地域である。台湾と周辺附属島は巨視的にはこの地域に包含してもよい。中国奥地の少数民族の研究は非常に重要であるが、この中国東南岸島嶼地域の調査研究はもっとさかんにならねばならないと思う。

第二の多島海は韓国南岸に点在する大小無数の島々。済州島との間にあるこの島嶼地域を韓国ではずばり「多島海」と称している。わたしもさる夏、一ヵ月間、島々をまわってみた。鶯島、草島、観梅島、丸島、小黑山島……。一ヵ月やそこらで見れる地域ではない。わたしがまわったのはたったの十島ていど。何百という有人島を全部見るだけでも、複雑な航路を考えた場合、相当な年月を必要としよう。しかし、それだけにこれらの島々にはセマウル運動以前の民俗をさぐることも可能である。韓国本土もどこを見ても日・中・琉・台比較の視点からすれば興味ぶかいが、韓国文化の古い姿を残しつつ日本文化との親縁関係を気づかせる多島海の文化は、日韓双方の民俗学徒がもっと目をむけなければならない地域であろう。

第三の多島海は南西諸島地域である。西日本南端部の南九州につづく甑島・種子島・屋久島・口永良部島・竹島・黒島・硫黄島からはじまり、トカラ列島をへて奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島とつづく島嶼群は南から北上する文化と北から南下する文化、中国、朝鮮の影響をうけた文化が混在しつつ、そこに育かれた独自の文化を放射する地域でもある。この地域と第一・第二の地域との比較はもっと活発にならねばならない。

第四の多島海は九州島西北岸から瀬戸内海地域である。対馬・壱岐はもちろんのこと、五島・天草から附近の島々および蓋井島から長門の島々、そして瀬戸内海の島々を中心として沿岸本土地域も包含する。場合によっては、九州、四国、本州西半もやはり大きな島であって、この第四多島海にふくめてよい。

これら四つの多島海地域は、古い時代において文化交流の出発地であり、かつ到達地であった。それぞれの国の古い文化の吹きだまり地であるとともに新しい文化の受入れ口でもあったのだ。これらの地域は、それぞれ共通の要素を持つとともに島ごとの独自性も持つという魅力ある地域である。小形馬やオモゲー・クツワの渡来も稲作・鉄器文化の渡来も、漢字や儒教、仏教もこれらの多島海域を経由して日本へ伝わった。これらの地域の比較研究は有形・無形をとわずもっともっとさかんにならねばならない。たえざるフィールド・ワークをつみかさねて自国の有形・無形の民俗につよい民俗学徒たちが、たがいに対岸の相手国の多島海へかけてフィールド・ワー

クを実施してこそ、相互比較の成果があがるのではなからうか。ひょっとしたら、そうしたフィールド・ワークの結果、新しい発見がいくつもあるかもしれない。文献を十分に読んでから行くというのもわるくはないが、それではいつまでもラチはあかない上に、先入感にとらわれてしまい、直感の心眼がくもる。まず、こちら側とあちら側の同分野のものをくらべてみることだ。そのあとで、文献の十分な探索と考察が行われるのがよいのではなからうか。そしてもう一度現地へ出かけて再調査し、再検討するのが望ましい。

『多島海の堂祭』を著した韓国順天大学教授、崔徳源氏は種子島でわたしどもと一週間、調査されてたいへん喜んでもらった。崔教授にとっては種子島のガローヤマ（伽藍山、森山）や巨樹を神体とする神社や能野焼よきのの窯跡や、農具、漁具などすべてが氏の得意のフィールドである全羅南道および多島海の民俗との比較対象になったのである。このように比較民俗学においてその効果を期待するためには、なんといってもまず自らの得意とするフィールドもしくは分野もしっかりと持っていないとならないのである。そうでないと、韓国の漁船や釣つりに日本系統のものがあるのを見とおしたりしてしまうのである。

東シナ海地域の比較民俗学はその方法も展開も多様であると思うが、わたしは自らの体験にてらして、マクロな視点での周囲論の効用と、日本を北・東・西・南日本にわけてみることの便利、東アジア内での北と南の民俗のちがいを、東シナ海を囲む四つの多島海の調査・比較の重要性をのべたつもりである。なお、周囲論については近年、ほとんど省みられない状況であるが、わたしは比較民俗学においては今なお非常に有効であると思っている。

新刊紹介

伊藤清司先生退官記念論文集編集委員会編

『中国の歴史と民俗』

慶応大学で中国古代史、民族史を講じられた伊藤教授の退官を記念しての論集。『山海経』の民族学的研究で知られる氏であるが、その旺盛なフィールドワークと文献学が結実した学風は、比較民俗研究のよき指針である。内容は第一篇神話と民俗と題し、伊藤清司「禹の治水」、大林太良「中国古代の馬車の神話」、加藤千代「流行神のうわさ、その位相」、君島久子「哀牢夷の九隆神話」、櫻井龍彦「彝族の祖先崇拜と他界観」、曾士才「苗族の憑きものに関する覚書」、竹村卓二「タイ北部山地民族のまれびと信仰」、谷野典之「中原神話考」、

森雅子「后羿叙事詩の復原」、第二篇は古代の思想と文化として、太田侑子「中国古代における夫婦合葬」、桐本東太「中国古代の服属儀礼」、斎藤道子「春秋時代における統治権と宗廟」、三條彰久「哭国考」、茂澤方尚「韓非子所見“衆人”考」、原宗子「管子地員篇の薬草について」、武者章「三式瘞鐘銘より見た西周中期社会の一動向」を収めている。

(佐野賢治)

A 5 判 357頁 第一書房刊
1991年10月刊 5800円